江戸「人間教育」の知恵

往来物研究家　小泉　吉永

悪童に体罰を加える手習師匠。一人は棒で叩かれ、もう一人は水の入った茶碗を持って天神机の上に正座させられている（これを「捧満（ほうまん）」と言う）が、子供はにやけた表情だ（『童子教稚絵解』より）

【第三二回】「六諭衍義」から展開した日本の育児思想

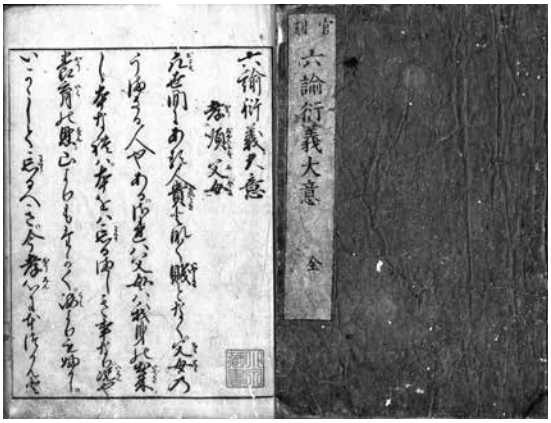
一四世紀末、明朝初代皇帝が発布した庶民道徳「六諭」は、一六世紀後半の解説書『六諭衍義』として普及、さらに、一八世紀初頭に琉球・薩摩藩を経て日本へもたらされ、徳川吉宗によって訓点本と和解本の二種が刊行された。特に和解本の『六諭衍義大意』は官民挙げて広範に流布し、約二〇〇年間、本邦の道徳教科書として用いられた。日本人は「六諭」をいかに解釈し、いかに自国の教育文化に展開していったのか、その一端を探ってみよう。

官民一体で流布した道徳教科書

寺子屋の道徳教育に多大な影響を及ぼしたのが『六諭衍義』である。

「六諭」は中国明朝初代・洪武帝が発布した庶民道徳で、「孝順父母（親孝行する）」「尊敬長上（目上を敬う）」「和睦郷里（近隣と仲良くする）」「教訓子孫（子孫を教え

〈官刻〉六論衍義（享保６年、江戸板）



〈官刻〉六論衍義大意（享保７年、江戸板）

導く）」「各安生理（家業に励む）」「毋作非為（悪事をしない）」の六カ条の教えである。

これを明代末期の范鉉が解説したのが『六論衍義』で、琉球人・程順則が康熙四七年（一七〇八）に留学先の中国福建省で複刻して持ち帰った。これが日本最初の伝来で、同書は享保四年（一七一九）、薩摩藩主・島津吉貴を通じて徳川吉宗に献上された。吉宗はこれを庶民教化に役立てようと考えたが、そのままでは難解なため、『六論衍義』の訓点を荻生徂徠、和解を室鳩巣に命じた。

そして、享保六年一一月に訓点本『〈官刻〉六論衍義』が、翌七年三月に和解本『〈官刻〉六論衍義大意』が幕府から刊行された（後に両者の板木は民間書肆に下賜され、題簽角書の「官刻」を「賜板」と改めた）。

漢文に訓点を施しただけの『〈官刻〉六論衍義』があまり普及しなかったのに対して、日本の実情に合わない部分を省くなど大胆に簡略化し、仮名交じり文で綴った『大意』は一部改変を伴いながら明治・大正期まで約二〇〇年間、我が国の道徳教科書として使われた。

刊行直後の享保七年六月には、『大意』の版下を揮毫した石川勘助を始め江戸の手習師匠一〇人に『大意』が与えられたが、以後、寺子屋教育の褒賞品にしばしば『大意』が下賜されるなど、幕府はその普及促進に積極的に関与した。また、諸藩の庶民教化にも大いに活用され、民間の書肆・有志もこれに呼応したため、『大意』は夥しく刊行され、全国規模で流布した。

さらに、『大意』の趣旨を詳述・敷衍した教訓書も数々登場したが、中でも最も早く詳しいのが、中村三近子作、享保一六年刊『六論衍義小意』で、庶民生活上の卑近な具体例や多くの訓話・俚諺・故事を引きながら丁寧に諭している。

『大意』が教えた幼児教育

『大意』も『小意』も、『六論衍義』の内容を日本の実情に即して改編または要略

〈賜板〉六諭衍義
（江戸中期、刊行者不明）

〈賜板〉六諭衍義大意
（天保 15 年、江戸板）

重刻六諭衍義［六諭衍義大意］（文政 13 年、秋田藩板）

し、庶民の誰もが理解できる平易な文章で綴った点は同様だが、論点の比重には違いもある。第四条「教訓子孫」に焦点を絞り、両書がこれをどう敷衍したのか、具体的に見ていこう。

まず『大意』である。以下は、現代仮名遣いや一部漢字表記を改めたほかは、ほぼ原文通りで、括弧書きで語意を補った。現代人にも分かりやすい平易な文章なので、ぜひ音読して頂きたい。

○子孫を教訓す

凡そ在家（民家）には子孫を重しとす。子孫人がらよければ家もおこり、人がらあしければ家も衰う。これ、みな人のしる事なれば、大家・小家ともに誰か子孫のよきをねがわざるべき。然るに、子孫生まれながらにしてよきはまれなり。必教訓によるべし。

其の教訓の法は、幼稚の時より、第一に父兄につかえ、尊く年たけたる者をば敬う道を知らしめ、さて言語は偽りなきようにといましめ、起居は必ずしずかなるようにといましめ、事をつとむるにはおこたらぬようにといましめ、人にまじわるには無礼なきようにといましむべし。朝夕出入には常に心を付けて、みだりに他行（外出）をゆるすべからず。飲食・衣服をば常に驕りを制して、自由に過分をなさしむべからず。勿論、一切無益の翫び物をすき好んで日を費やす事あらしむべからず。

古より「朱に近づけば赤く、すみ（墨）に近づけば黒し」といえり。仮にも遊女・博奕の場にあそばしむべからず。軽薄・浮気の輩にまじわらしむべからず。常に学文（学問）をさせて、聖賢の道をしらしむべし。……（中略）……

近代以来、父祖たる者、教訓の法をしらず。其の子孫を育つるを見るに、ただ眼前の愛に溺れて、一切の飲食・衣服・言語・挙動まで小児の気随にするをよしとす。是によりて、子孫たるもの、幼少より一言のよき話を聞かず、一毛の好き事を見ず。その習わし癖となれば、放逸（勝手気侭）をのみ好みて、仮にも礼儀

の正しき事をしらず。たまたま学文をすすむといえども、人たる道を教えんとはせずして、ただ是を以て名利の媒とする故に、其の子孫、たとい学文すと云えども、道理において何をか自得すべき。我が身の行いにおいて何の益かあらん。

さるほどに、或いは貨財（財貨）を貪り、或いは酒色に耽り、おおく悪名をとり、身を持ちくずして、父母にも難儀を懸くるぞかし。又、女子も家にあるときに教訓の法なく気随にそだつ故に、すでに人に嫁しても家を治むる事かなわずして、追い出さるる者も世にそのためし（例）おおし。是、必ずしも子孫のとが（咎）にもあらず。そのかみ（昔）、教訓の法たが（違）うが故なり。しかれば、親の慈悲にもそむくにあらずや。孔子も「子を愛せば苦労をさせよ」と宣えり。尤も、さもあるべき事なり。

まず、幼児教育の重要性を説き、①親に従い年長者を敬う、②嘘のない言葉、③静かな立居振舞、④精勤、⑤礼儀、⑥みだりに外出しない、⑦衣食を驕らない、⑧無益の遊びで時を費やさない、⑨悪所・悪友を避けるなど育児の要点を掲げ、近年の間違った子育てとその結果を述べて戒めとする。

『小意』が強調した幼児教育の要

『大意』の「教訓子孫」は原文で五七行（一行約一七字）、『小意』は二二八行（一行約一六字）である。つまり『小意』は『大意』の約三・八倍の長文であり、「教訓子孫」の一条も次の六章に分けて詳しく解説する。以下はその要旨である。

①英才な生まれ付きでも、父兄の教訓がなければ放埒（勝手気侭）の人となる。教訓の道は学問が一番の近道。「中らずといえども遠からず」のように、良き道を学べば人の道から外れる所作はない。命中せずとも的に向かって矢を放てば、決して背後へは行かず、多くは的の近くに向かうだろう。

②むやみに多くの書物を読むばかりが学問ではない。例えば『実語教』や『今川（状）』を初心者の書物と侮ってはならない。『今川』の一書も深く理解すれば生涯役立つ。博学多聞は悪いことではないが、知識過剰で早合点し、よく検討もせず、理屈が度を超せば大きく過つ。

③芸の習得も育児の一つだが、遊芸などは吟味が必要だ。書読（読み書き）こそ万芸の根本である。忠孝を弁え、身を修め、言行を慎み、先祖からの家業を守る。その結果、賢者となり、天の恵みを長く受け、大いに家を興し、先祖の名も輝かす。これらは専ら書読から始まる。苗が実って米になるまでの養育には一瞬の絶え間もないことをよく弁えよ。

④姑息（一時的な間に合わせ）の愛、無分別や甘やかしの教育は子にとって有毒だ。逆に、余りに厳しく責め苛み、杖や棒で叩き、茶碗・割木（薪）等を投げつけるなどの体罰はもはや教訓ではなく、全く喧嘩の仕方である。これで、人間ら

しく育つはずがない。東西の区別も付かない時分から行儀作法をよく仕付け、言葉を美しく使う習慣を付け、仮にも嘘や盗み心が起きないように「漸を計って（わずかの変化に注意をして）」教えよ。幼時の習慣が天性（生まれ付き）の癖となり、善悪ともに染みついた癖は成人後に矯め直すことはできない。だからこそ、良い癖を幼少から付けさせるべきであろう。教訓は要所を教えるべきで、昼も夜も子を責めさいなめば、その子は次第に「真面目（緊張で目をパチパチさせ、怯えて硬い表情になること）」か病身となる。

六諭衍義小意（享保16年、江戸・京都板）

⑤下々では「我が家如きの家業に学問など不相応」と言う者がいるが大きな心得違いだ。下々の子でも「どうか実直に家職に精出し、息災に生長し、親孝行もして欲しい」と願うのが親心だが、それを促すのが学問である。たとえ古人の書を読まず、仮名書きの『六諭衍義大意』をよく読み、その教えに背かなければ全て学問である。

⑥古人は「漸を杜ぐ（少しずつ増大するリスクを事前に食い止める）」と教えた。子は成長とともに悪くなりやすいため、「漸々」の末を考え杜ぐのである。また「児に教ゆるは嬰孩」と言い、乳呑み児がようやく座り、人を見て微笑む「嬰孩」の頃から教えることが大切だ。世俗の子育てを見ると、二、三歳の子は愛らしいため、姑息の愛に溺れ、悪さをしても「愛らしい」と喜び、父母や兄弟を叩いても「可愛らしい」と言い、「祖父母の物をそっと盗んでおいで」などと促す。子は、これらを皆、良いことと思い、その習慣が天性自然のようになれば、最後は不道人になるに違いない。悪人になりきってから、にわかに諫言を尽くしたところで、中々聞き入れるはずがない。

以上のように、『小意』は庶民の学問や幼児教育などの要点を掘り下げている。特に、間断のない子供の成長に油断せず、赤子がお座りをする生後六カ月頃からは、「漸を計る」教育、「漸を杜ぐ」教育の必要性が強調されており、総花的な『大意』の要所を際立たせている。

三近子は、自らを「六諭衍義大意を小子（子供）に触れ回る抱関撃柝（門番や夜警をする役人）の者」（序文）と表現した。彼は、『小意』を通じて『六諭衍義大意』を大人よりも子供に深く理解させようと試みたのである。